

## 過去の地震から知る、未来の備え ～「被災地から離れる」という選択

名古屋大学災害対策室 木村玲欧

未来の地震にそなえるためには、過去の地震を知ることが大切。1945年にこの地域で2,306人の死者を出した「三河地震」から、未来の備えにつながる教訓を考えていきます。

■家が全壊したため、子どもたちだけ親せきに預けられた。親せきの家は農家で食べものに困ることはなかった。ただ、弟、妹とは別々の家に預けられ、父にもほとんど会えなかったのが寂しかったし、学校でも仲間はずれにされた。(宝飯郡形原町(蒲郡市形原町)小沢正彦さん)

僕らが行くと、親せきの家でも子どもが増えるじゃんね。子どものころなのに、肩身のせまい思いをしてたよ。結局、親せき3軒くらいを1年くらい転々としただね。ただ、親せきの人には感謝とるだよ。みんな、一生懸命やっつけられたもんだ。少なくとも食べ物には困らなかった。

あと、転校して学校へ行っても、仲間外れにされてね。ほいで、ほとほと嫌になって、たびたび途中で海岸へ行っさぼって。ほいで、探しに来た先生に見つかって、ごっつう怒られたね(笑)。



絵 藤田哲也

災害は、被災者の「こころとからだ」にダメージを与えます。特に、子どもや高齢者などが大きなストレスを乗り越えていくためには、「非日常世界である被災地から離れる」という選択肢をぜひ事前に検討しておいてください。遠い場所に親せき・友人などがいて「何かあったらよろしく頼む」と言うことができる関係があれば、そこは有効な疎開先です。

「遠い場所に親せきがない」「親せき・友人には気兼ねをしたくない」という場合には、全国商店街震災対策連絡協議会が取り扱っている「震災疎開パッケージ」を検討してみてください。これは1人年間5,000円(小学生以下は年間3,000円)を支払えば、被災時に「受け入れ先として名乗りをあげた全国各地が一定期間『お客様』として加入者を迎える」というものです。上限は1人30万円(小学生以下は1人15万円)。加入期間(1年間)に被災しなければ、全国の名産品(3,000円相当)をもらえるので、実質2,000円の掛け捨てです。なお、疎開先下見ツアーなどで疎開地域の人たちと顔見知りになることもでき、安心して疎開できる利点もあります。

いざ疎開をしたときに、子どもたちには「疎開先での学校生活」の問題が待っています。大人から見ると些細なことかもしれませんが、子どもにとっては重大事です。「震災で怖い思いはしたが、友だちが大勢いる元の場所に戻りたい」「周囲から気を遣われてすぎて、かえって緊張がとれない」「『まだ地震のことを言っていて甘えている』と言われて仲間はずれにされた」などといった震災ストレスが、子どもの不登校・粗暴化などとなって現れることもあります。受け入れる側は「普段どおりの生活を送ることができる」「みんなと緩やかにつながっている」という「安心感」を子どもたちに持ってもらい、子どもたちに様々な感情・言葉を自然に出してもらおうような環境を作ることが理想的です。